



TITLE:

# <教室通信>博士課程前後期連携教育プログラムについて

AUTHOR(S):

木本, 恒暢

---

CITATION:

木本, 恒暢. <教室通信>博士課程前後期連携教育プログラムについて.  
Cue 2012, 27: 64-64

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/156039>

RIGHT:

**教室通信****「博士課程前後期連携教育プログラムについて」**

木 本 恒 暢

エネルギー資源に乏しい我が国が、高い国際的プレゼンスを維持するためには、継続的なイノベーションの実現とその担い手となる優秀な若手研究者、技術者の育成が極めて重要です。このミッションを果たすべく、工学研究科電気系専攻（電気工学専攻、電子工学専攻）では、広い視野と深い専門性を持って自らの力で研究開発を企画、実行でき、国際舞台で活躍できる自立型研究者の育成を目指す独自の修士・博士一貫教育プログラム（「連携教育プログラム」）を推進しております。本稿では、この教育プログラムの概要について簡単にご紹介申し上げます。

この「連携教育プログラム」は、平成 20 年度に工学研究科で制定されたものですが、電気系専攻では、文部科学省から支援を受けているグローバル COE プログラム「光・電子理工学教育研究拠点形成」の人材育成活動と一体化させ、大変充実した教育プログラムを構築しています。その取り組みの例を以下に記します。

**1) 修士・博士一貫教育プログラムの導入**

学部の学業成績が極めて優秀で、かつ挑戦的な研究に高い意欲を有する学生を選抜し、指導教員の面談を経て出願に至ります。大学院入試における筆記試験を免除し、志望する研究室に優先的に配属させて、早期に本格的な研究に着手させています。専攻が主催する進捗発表会を実施して指導するなど、教室を挙げて組織的に学生の教育を行う環境を整えています。なお、上記の特別選抜者以外にも、学部 4 回生の卒業研究を通じて研究の魅力を強く感じ、博士後期課程への進学を志望する修士課程学生を積極的に本教育プログラムに編入する制度も設けています。

**2) 複数教員指導制の導入**

従来、大学院学生の指導は、研究室の指導教員がほぼ全て行っていました。本プログラムでは各学生に対して、主指導教員に加えて 2～3 名の副指導教員（異なる分野、研究室）をアサインし、定期的に異分野の教員（副指導教員）と議論し、助言を受ける制度を導入しています。これにより、視野の拡大や境界領域の開拓が効果的に行われます。

**3) カリキュラムの改訂**

他専攻（化学系、材料工学、理学研究科など）が提供する科目の履修や共同研究インターンシップ（国際インターンを含む）などが修了要件として認定されるようにカリキュラムを改訂し、柔軟性や国際性の涵養を促進しています。

**4) 多様な人材育成活動**

博士後期課程学生による合宿型集中セミナー（セミナー道場）、競争的資金制度の導入とその成果報告を英語で実施する英語コンテスト、短期～中期の海外派遣、若手研究者を中心とした国際シンポジウムの開催、異分野の学生が集まってディベートを行う研究萌芽クリエーションルームの設置、英語研修など、教室を挙げて当該プログラムの学生教育に力を注いでいます。

以上のように、教室全体で取り組む「エリート教育」により、幸いにも博士後期課程への進学者が大幅に増加し（現在の博士後期課程充足率はほぼ 100%）、学生による学会での受賞も急激に増えて、教室全体の活性化に繋がっています。このように、本教育プログラムを修了した博士は、専門分野に特化する傾向のあった従来の博士とは異なり、多様な分野を俯瞰、統合する能力や、グローバルな視野と柔軟性をも身に付けた「21 世紀型博士（工学）」であり、10～20 年後の日本の産業界や学界を牽引するリーダーに育つ資質を備えていると考えております。

平成 25 年 3 月に、本教育プログラムの第一期生の博士が社会に旅立ちます。産官学の先輩諸氏の皆様方におかれましては、この第一期生にご期待いただくと共に、より一層のご支援と御鞭撻を賜うことができれば幸いです。